

学位論文題名

ミーマーンサー学派における意味認知理論の研究

学位論文内容の要旨

本論文の題目にある「ミーマーンサー学派」とは、古代インドの司祭階級バラモン諸学派のうち、祭式文献ヴェーダの分析をもとに独自のテキスト解釈理論を作り上げた学派である。本論文は、10世紀中頃の学者ヴァーチャスパティ・ミシュラが著した『タットヴァビンドゥ』（真理 (tattva) の滴 (bindu)）の解明を中心に、インド独自の言語哲学において、文の意味を認知する過程はいかなるものであるか、またそれをいかにして考察すべきであると考えられていたかを明らかにした。『タットヴァビンドゥ』は、7世紀初めにミーマーンサー学派を哲学学派として確立したクマーリラの立場から、他学派および学派内部の異流派の学説を批判しつつ、文の意味認知の過程を考察した論書である。

本論文第1章は、ヴァーチャスパティが、文の意味認知を説明するどのような学説を取り上げ、それをどのような原則によって検討していくかを本論文独自の観点から総括する。『タットヴァビンドゥ』冒頭でヴァーチャスパティは、文の意味認知の直接の原因は何か、という問いに対して諸学派で提案されていた5つの学説、即ち

1. スポータ説（単一の文本体（スポータ）が仮に分節化しつつ徐々に明晰に認識される）
2. 最終音素説（文を音素ごとに順次聴取したのちの最後に位置する音素の知覚による）
3. 音素連鎖説（文を音素ごとに聴取し終わった後の音素連鎖の想起による）
4. 「関連したものを表示する」説（他の諸単語の意味と関連をもつ限りで、諸単語が各自の意味を限定的に表示することによる）
5. 「表示されたものが関連する」説（単語の意味が他の諸単語とは独立に表示された後、他の諸単語の意味と関連して限定されていくことによる）

の5つの学説を挙げ、はじめの4つの学説を順次論駁ないし批判し、自派の学説である第5の学説の妥当性を最後に論じていく。さらに森口氏は、ヴァーチャスパティが本書において、ミーマーンサー学派で伝統的に認められていた理論構築の原則を、【想定原則1】「観察されたものから結果が成立するならば、観察されないものを想定してはならない。」と【想定原則2】「想定は軽い（＝数が少ない）説を我々は好む。」との、二通りに提示していることを指摘した。

第2章の第1節は、ヴァーチャスパティに先行するミーマーンサー学派内部で文意認知の過程がどのように考えられていたかを、シャバラスヴァーミン（6世紀）およびクマーリラの著作により構成する。次に、第1の学説「スポータ説」についての『タットヴァビンドゥ』の記述を取り上げ、前半を成す「最終音素論者とスポータ論者との論争」を第2節で、後半を成す「ヴァーチャスパティ自身によるスポータ説の検討」を第3節で検討する。第2節は、いずれの側からの論難においても、【想定原則1】が適用されていることを明らかにした。第3節は、ヴァーチャスパティが自らスポータ説を批判するに際しても、専ら【想定原則1】のみを適用していることを指摘し、その批判の中心が、「単語を構成する音素を順次聴取した後に明瞭に形成されるのは単語の意味の認識であるから、単語の本体としてのスポータが知覚されているのではない」とすることにあるのを明らかにした。第4節では、スポータ説批判に続いて批判の対象となる「最終音素説」は、もともと古い時代のミーマーンサー学派で単語の認知過程の説明として提起されていたが、ヴァーチャスパティは最終音素説を単語レベルでの議論から文レベルの議論へと移し変えたこ

とが指摘されている。第5節は、ヴァーチャスパティが「音素連鎖説」を検討するに際して、『タットヴァビンドゥ』において初めて【想定原則2】を行使していることに着目し、この説の検討によって本書における議論の方向をヴァーチャスパティが明確に転換したことを指摘する。ヴァーチャスパティは、呼びかけ語・命令法動詞・目的語の同一構文に単語を組み込んで文を形成し、個々の文の意味認識の原因として、文の音素連鎖と音素連鎖の中に組み込まれた諸単語とのいずれが相応しいかを比較する。そして組み込まれた単語の語彙数を増やすにつれ、音素連鎖の可能性の数が単語の語彙数より甚だしく増えるので、【想定原則2】により音素連鎖説は退けられる。この論証は、ヴァーチャスパティ以前に、プラバーカラ派のシャーリカナータが、一つの文全体に単一のスポータを想定するスポータ説を論駁するために考案している。ヴァーチャスパティは、【想定原則1】によりスポータ説を全面的に論駁した後に、スポータ説とは別に音素連鎖説を設定し、自説により近い立場の学説との優劣を決める基準として【想定原則2】を用いて、ミーマーンサー学派内に現れたプラバーカラ派との論争のための前提となる検討を行なった、と森口氏は推測する。第6・第7・第8節は、プラバーカラ派が唱える「連関したものを表示する」説検討部分の考察である。ここでヴァーチャスパティは【想定原則2】をあらためて行使しなおし、文において単語が個別に意味表示をした後に単語の意味どうしが連関するというクマーリラ派の立場に比べるならば、プラバーカラ派は同じ単語にそれ自身の意味の表示と他の語との連関の表示という二つの働きを帰せており、クマーリラ派の学説の方が、実は説明原理が簡素で、より優れた学説であると結論していることが明らかとなった。

第3章は、ヴァーチャスパティがクマーリラ派の「表示されたものが連関する」説を擁護する根拠を、インドの伝統的修辞学と現代の認知心理学の観点から比較考察する。ヴァーチャスパティは『タットヴァビンドゥ』において、クマーリラ以前の文法学派とミーマーンサー学派との間でのスポータ説と音素説の対立、及びクマーリラ以後のミーマーンサー学派内の二学派の対立を軸にして、言葉の意味認知に関してインドで考案された様々な理論を総合的に集約した。しかしながらヴァーチャスパティは、クマーリラ派学説の妥当性を論証するという任務に邁進する余り、他学派が萌芽的にせよ提起していた様々な、現代から見れば興味深い理論を説明原理が煩瑣であるというだけで切り捨てている。そしてプラバーカラ派のシャーリカナータが指摘した、文を聞く聞き手の意識内において単語の意味認知は他の単語との繋がりからの期待に影響されているという経験的事実（文内部での文脈効果）を、ヴァーチャスパティはクマーリラ派が説くボトムアップ型の意味認知過程により満足に説明できていない、と森口氏は批判的に評価している。

学位論文審査の要旨

主 査 助 教 授 吉 水 清 孝
副 査 教 授 藤 井 教 公
副 査 助 教 授 花 井 一 典

学 位 論 文 題 名

ミーマーンサー学派における意味認知理論の研究

審査の方法および経過：

平成 15 年 12 月 19 日 審査委員会発足 論文配布
平成 15 年 12 月 22 日 第 1 回審査委員会 論文概要の確認，審査日程の確認
平成 16 年 1 月 16 日 第 2 回審査委員会 論文の構成と内容の検討
平成 16 年 1 月 23 日 第 3 回審査委員会 論文の研究成果の検討と口述試験方針の確認
平成 16 年 1 月 26 日 口述試験実施
平成 16 年 1 月 26 日 第 4 回審査委員会 口述試験結果の検討，学位授与の可否の決定
平成 16 年 1 月 27 日 主査による審査結果報告書原案の作成と回覧
平成 16 年 1 月 29 日 審査結果報告書の確定

当審査委員会は、以下に述べる諸点において、本論文がインド哲学の研究領域での新たな研究成果を挙げていることを認定した。森口氏は、凝縮した文体で綴られた『タットヴァビンドウ』全篇を註釈及び他文献と比較しつつ丹念に読み進め、ヴァーチャスパティが、文の意味認知を説明する理論を検討するための基準として【想定原則】を二通りに区別し、それぞれの原則に異なった役割を与えていることを見出した。即ち【想定原則 1】は専ら文法学派のスポータ説を批判する中で行使されており、語や文の本体が音素とは別に存在するとする文法学派説を、クマーリラ派から最もかけ離れた説として全面的に否定するための「正誤判定の基準」となっている。これに対し【想定原則 2】は文法学派批判の中では適用されておらず、文を音素の集合体と見る限りでは一致しているミーマーンサー学派内部で、特にプラバーカラ派の「関連したものを表示する説」を批判する際に集中して適用されており、近似した立場の相手に対し自己の優位を主張するための「優劣判定の基準」となっていることが判明した。さらに本研究により、ヴァーチャスパティは異説どうしを論争させたうえで、問題点を指摘されつつ生き残った異説に対して、自ら【想定原則】を駆使して批判するという周到な方法を取っているが、批判の仕方が必ずしも公平とは言えず、クマーリラ派説の擁護を目的とした伝統重視の姿勢が強いことも明らかになった。そしてヴァーチャスパティが文内部での文脈効果を説明できていないこと自体が、個々の単語の意味の認識に始まって小さな部分からより大きな構成単位へと一方向的に理解が進んでいくという、ボトムアップ的な過程だけによる説明は、文の意味認知過程の説明モデルとして限界があることを示唆している、ということも明らかにされた。

次に当委員会は、本論文の評価と、本論文を提出した森口真衣氏への学位授与に関して、次のような所見をまとめた。西洋では 14 世紀にウィリアム・オッカムが「感覚的事実と論理により導出されない限りは、いかなる存在も認められない」また「必然性なしに多くのものを立てるべきではない」と主張し、所謂「オッカムの剃刀」による形而上学批判を行った。本論文は、10 世紀のヴァーチャスパティが、伝統的にミーマーンサー学派で認

められていた【想定原則】を二通りに区別して自覚的に行使していたことを明らかにしたが、この二通りの【想定原則】は、まさに「オッカムの剃刀」に相当するものである。またミーマーンサー学派は、専ら言語事象の説明原理として【想定原則】を活用しており、本論文が明らかにした文の意味の認知過程を巡るインドの議論には、言語の統語理解のモデルとしてトップダウン型の認知過程とボトムアップ型の認知過程のいずれを重視するかという、現代の認知科学においても重要な発想の対立が根底にある。従って本論文は、言葉に対する鋭敏な感覚に裏付けられたインド思想の特質を、西洋哲学及び現代の認知科学の観点から理解する上で意義のある成果を挙げたと言うことができる。ただし本論文がその全体像を解明した『タットヴァビンドゥ』は単一の文の意味認知過程だけを主題とする論書である。このため本研究は、単一の文を超えたテキストの文脈の中で文がどのように機能するかという問題領域にまでは踏み込んでいない。しかしながら単一の文をめぐる理論はテキストの文脈を扱う理論の基礎となるものであり、本論文は課程博士学位論文として十分な水準に達していると当委員会は評価する。以上により当委員会は全員一致して、森口氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。